

今週の為替相場見通し(2025年6月9日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		142.40 ~ 145.09	144.87	143.00 ~ 146.50
ユーロ	(ドル)		1.1341 ~ 1.1495	1.1398	1.1275 ~ 1.1550
(1ユーロ=)	(円)		162.80 ~ 165.20	165.06	162.50 ~ 168.00
英ポンド	(ドル)		1.3457 ~ 1.3616	1.3518	1.3200 ~ 1.3700
(1英ポンド=)	(円)	*	192.73 ~ 196.19	195.93	192.00 ~ 198.00
豪ドル	(ドル)		0.6432 ~ 0.6538	0.6495	0.6350 ~ 0.6650
(1豪ドル=)	(円)	*	92.06 ~ 94.13	94.04	92.00 ~ 96.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 山田 隆広

(1)今週の予想レンジ: 143.00 ~ 146.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

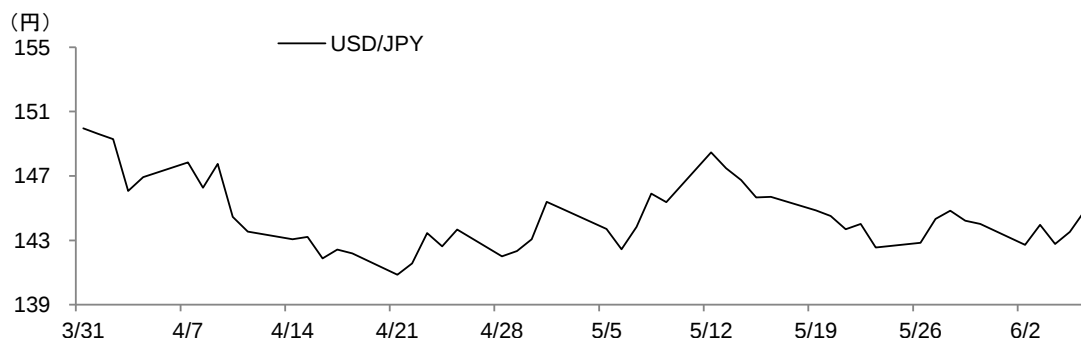
先週のドル/円は143円台半ばを挟みレンジで推移。週初2日、ドル/円は143.79円でオープン後、先週末のトランプ米大統領の鉄鋼・アルミ関税引き上げ発表などによるリスクオフの高まりから軟調な展開。米5月ISM製造業景気指数の市場予想対比弱い結果も重なり、142円台後半まで下落。3日、ドル/円は週安値142.40円まで続落したのち、植田日銀総裁が利上げを急がない姿勢を示したことで143円台へ反発。その後も米4月JOLT求人件数の強含みなどから上昇する米金利に連れられて144円台まで続伸。4日、予想外に悪化した米5月ADP雇用統計や米5月ISM非製造業景気指数の結果を受けたFedの早期利下げ観測からドル/円は142円台半ばまで急落。5日、米新規失業保険申請件数は予想外に増加し米労働市場の変調が懸念されるも、米中首脳電話会談を無難に通過したことで米中貿易対立緩和期待からドル/円は144円台に急伸。6日、超長期債発行額減による国債の需給改善期待から本邦金利が低下するなか、ドル/円は底堅く推移。米5月雇用統計では非農業部門雇用者変化と平均時給の伸びが市場予想を上回り、Fedの利下げ開始時期後退の思惑から週高値の145.09円まで上値を伸ばした後、144.87円で越週。

今週のドル/円はじり高推移を予想する。週末のG7期間に調整中の日米首脳会談や翌週に日米両国での中銀会合を控え方向感が出にくいと思われるが、米関税政策を巡るインフレ再燃懸念や各国との貿易交渉進展期待からドルが買われやすい地合いとみる。今週は11日(水)に米5月CPI、12日(木)に米5月PPIが発表予定であり、市場予想は其々前年比+2.5%、同+2.6%と伸び幅の再加速が見込まれている。足許企業の仕入価格上昇や在庫取り崩しの動きが確認されるもと、本格的な価格転嫁による強い物価上昇圧力が確認された場合には米金利高止まりが意識されドル買いが強まろう。併せて、米関税政策を巡ってはベッセント米財務長官が複数の大規模な貿易合意の可能性に言及しているほか、9日(月)には第2回米中閣僚級協議が開催予定。関税延長期限が来月9日に迫るなか今後は各国の対米貿易交渉進展期待が高まりやすいとみており、リスクオフの巻き戻しがドルの下値を支えると考ええる。なお、日米首脳会談が実現した際のドル安誘導の可能性は念頭に置く必要がある。また、翌週の日米両国の中銀会合では何れも政策変更の想定ないものの、早期利下げを求めるトランプ米大統領は次期FRB議長の早期指名を示唆。会合前に発表となればFedの利下げ加速観測からドルには下押し圧力になると考えられるため警戒が必要。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/2~6/6)の値動き:

安値 142.40 円 高値 145.09 円 終値 144.87 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 1.1275 ~ 1.1550 162.50 ~ 168.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは一進一退の推移。週初2日、東京オープン前に週安値である1.1341を付けたものの、その後はドル売りに合わせて上昇。米5月ISM製造業景気指数が予想を下回ったことを受けてさらにドル売り地合となり1.1449まで上昇。その後は伸び悩み、1.1443でクローズ。3日、東京時間から前日を巻き戻すようなドル買いフローによりじわじわと下落。米4月JOLT求人件数が予想より強く、1.1364まで下げた。4日、米5月ADP雇用統計が予想を下回ったことから週末の米5月雇用統計に対する警戒感が強まりドル売り先行。5日、ECBはコンセンサス通り▲25bpの利下げを行った。米新規失業保険申請件数が予想対比上振れして上昇したものの、ラガルドECB総裁の会見で利下げサイクルは終焉に近づいているとの認識を受けてユーロが買われ週高値である1.1495まで上昇。その後は米中のトップ電話会談がポジティブに受け止められてドルが買い戻された。6日、前日の米中首脳会談を受けたリスクオンムードからドルが上昇しじり安で推移。堅調な米5月雇用統計の結果を受けたドル買いに1.1372まで下落するが、その後はリスクオンのユーロ/円の買いに1.1416まで戻す。その後は1.1400付近での推移が続き、1.1398で越週。

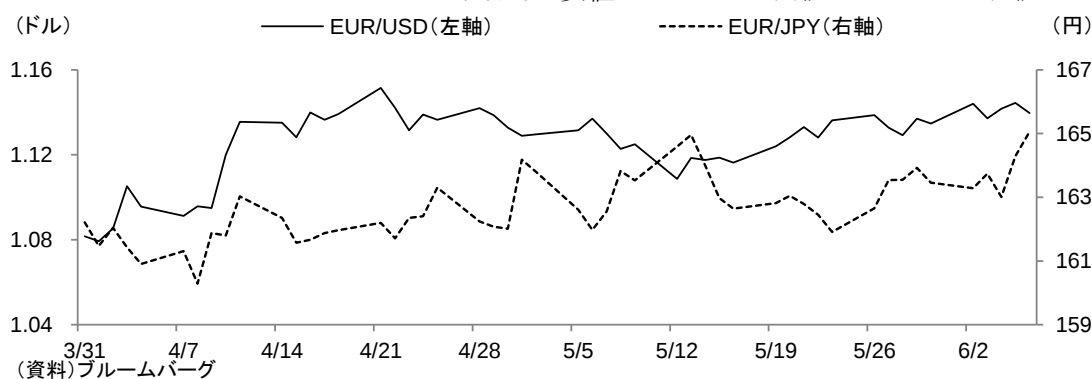
今週のユーロ/ドル相場は底堅い展開を予想。11日(水)に米5月CPI、12日(木)に米5月PPI、13日(金)に独・仏5月CPI(確報)、米6月ミシガン大学消費者マインド(速報)が予定されている。複数のECB高官メンバーの発言が予定されているが、先週ECB政策理事会を終えた直後であり、特に利下げサイクルの終焉に近づいている9月に一回利下げが織り込まれている現状では発言により振られる展開にはなりにくいだろう。米国との関税交渉やウクライナ情勢に振られる展開が続くと思われるが、ロシアとウクライナの停戦合意もすぐには見込める状況にないことから大きく相場を動かす材料にはなりにくい。米国の5月CPIの発表が予定されているが、先週のデータが弱かったことから市場は米国の景気後退を相応に織り込んでいるものと思われる。仮にCPIが強かったところでスタグフレーションが意識されることから、米CPIの結果に関わらず基本的にはドル売りによるユーロ上昇が見込まれる。テクニカル的には4月に2023年頭から続いていた1.0600~1.1275の長期的なバンドを超えてからは高値圏で推移しており、バンドの上限と一目の雲の上限も重なる1.1275周辺がサポートラインとして意識されるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/2~6/6)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1341 高値 1.1495 終値 1.1398

(対円) 安値 162.80 高値 165.20 終値 165.06



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3200 ~ 1.3700 192.00 ~ 198.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は堅調。週末のトランプ米大統領の関税ヘッドラインにドル売りの中、週初2日1.35台で堅調推移継続。3日はややドルが買い戻され1.35ちょうど近辺へ押される。4日は米鉄鋼・アルミ関税引き上げの発効日（英国は対象外）であったが、欧州株は堅調で為替市場は動意薄。5日は、ECBが予想通り政策金利を引き下げた後にラガルドECB総裁が利下げサイクル終了を示唆するとユーロ買いにつれて、英ポンドは1.36台に。週末6日は米5月非農業部門雇用者数が予想を上回るとドル買い戻しに英ポンドは1.35台前半へ下落した。英ポンドは対円で上昇。2日に193円台で始まると、円買いに押され上値重い立ち上がり。3日はドル買い戻しでドル/円の上昇に連れて194円台へ。4日には一時195円台へ上昇するも、米5月ADP雇用統計が予想を下回るとドル/円の下落につれ194円を割り込む。しかし5日は米中電話会談を受けたドル/円上昇と堅調な英ポンド推移も相まって195円台まで再上昇。週末6日は米5月雇用統計後のドル/円上昇につれて196円台を記録した。

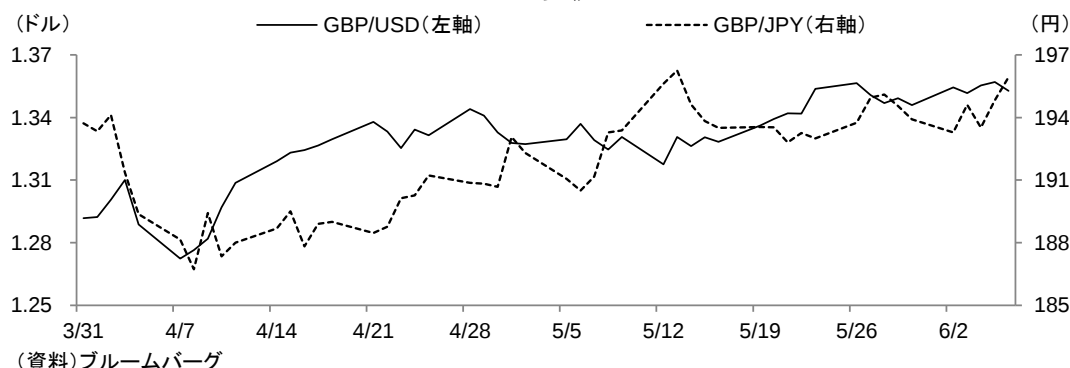
今週の英ポンド相場は、堅調推移継続を見込む。引き続きドルの不透明感が払しょくされないだろうということが見込まれるため。英側からは10日（火）に英4月までの雇用関連統計と12日（木）の英4月月次GDPが注目される。だが、すでに今月の英利下げを見込む向きは下火になっており（執筆時点でスワップ市場の織り込みはほぼ0%）、余程の労働市場の悪化やGDP鈍化がなければ為替市場への影響自体は限定的か。英政府関連で11日（水）にリーヴス英財相が歳出・投資計画について発表する（Spending Review）。数か年分の計画を示すものとしては2015年以来となるようで注目となる。とはいえ、英国債市場を振らせたことが記憶に新しい予算案とは違うため市場への影響は限定的との見方が大勢だが、国内では増税の可能性やいくつかの投資計画などが取りざたされており注目イベントとなっている。

(3) 先週までの相場の推移

先週（6/2～6/6）の値動き:

(対ドル) 安値 1.3457 高値 1.3616 終値 1.3518

(対円) 安値 192.73 高値 196.19 終値 195.93



4. 豪ドル

国際為替部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 0.6350 ~ 0.6650 92.00 ~ 96.00 円

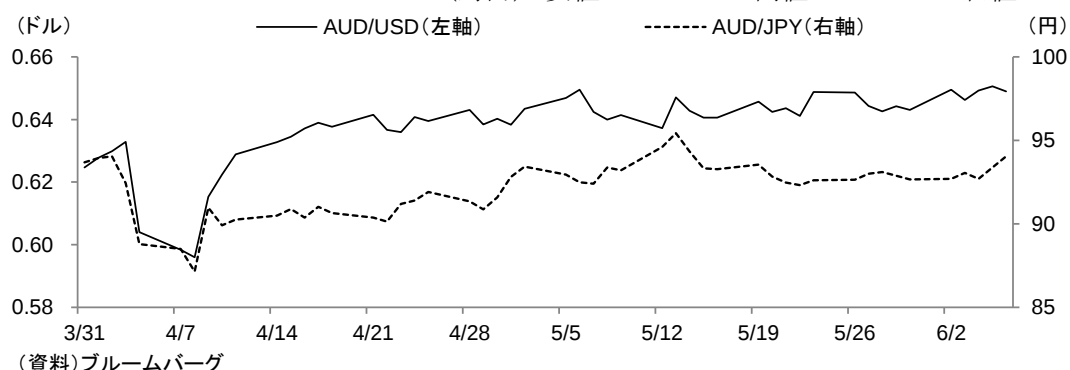
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは小幅上昇となった。週初2日の豪ドルは0.6436でオープン。米国時間には、米5月ISM製造業景気指数が下回ったことを受けドル安の展開となり、0.6500まで上昇して高値圏で引け。3日、アジア時間に発表された中国5月財新製造業PMIが弱い結果となったことを受け豪ドル安の展開となり0.64台半ばまで下落。5月開催のRBA議事要旨は更なる利下げに関する言及や、米国の関税政策に対する警戒が一段と高まっていたことが示唆された。4日、米国時間に発表された米5月ADP雇用統計等の米経済指標が弱い結果となったことを受けて再び0.6504まで上昇となった。5日、ECB政策理事会にて今後の利下げサイクルの終焉を示唆したことを受けたユーロ/ドルの上昇につられて豪ドルも週高値の0.6538まで上昇。ただし、その後は米中首脳が関税に対して更なる協議を実施するとの報道を受けてドルが買い戻され0.65付近まで下落となった。6日、米国時間に発表された米5月雇用統計は事前予想を上回る内容となったが、ドル・豪ドルともに買われる地合いとなり豪ドルは大きな値動きとはならず狭いレンジ推移となり0.6490台で越週となった。

今週の豪ドルは、底堅い展開を予想。5月のRBA議事要旨において米国の関税政策に対する警戒感は一層高まっている状況ではあるが、豪雇用は堅調であり豪4月CPIについてもインフレが継続している状況が確認されており、4月月初のトランプ関税で大幅に下落して以降上昇トレンドが継続しており、豪ドルは買われやすい地合いと予想。引き続き米関税ヘッドラインに左右される展開であることは間違いないが、米中における関税議論も進展の兆しを見せていることも豪ドルの底値が固い要因の一つと思われる。今週発表される経済指標としては10日(火)に豪6月ウエストパック消費者信頼感、12日(木)に豪6月消費者インフレ期待が発表予定となっているが値動きに大きな影響は与えないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/2~6/6)の値動き: (対ドル) 安値 0.6432 高値 0.6538 終値 0.6495
(対円) 安値 92.06 高値 94.13 終値 94.04



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。